アーレント『活動的生』
第四章

上村 泰裕（名古屋大学）

第四章　制作
18　世界の持続性

- 制作された物が集まり、持続性を持った世界が打ち立てられる。p162
- 個々の物は置き換えられていくが、世界全体に終わりはない。p163
- 生々流転する自然に人間的な同一性を与えるのが物の客観性。p164
- 自然に対して周囲環境を築いたからこそ自然を客観化できる。p164
- 農耕労働は、荒野を風景世界に変貌させる点で制作に近い。p165

第四章　制作
19　物化

- 制作は、素材を獲得するために自然を破壊することから始まる。p166
- 制作は、何らかの設計図、イデアの導きのもとで行なわれる。p168
- 労働生産物は手段と化すが、制作された物は一個の目的である。p170
- 行為は終わりも目的もないが、制作は始まりと終わりがある。p171
- 制作する人は自由に物を作り、気に入らなければ破壊できる。p172

第四章　制作
20　労働において道具的なものの果たす役割

- 道具は手に仕えるが、機械は労働者の身体の適応を求める。p175
- オートメーションの結果、世界を作る目的は見失われる。p179
- 物を作る機械を発明する代わりに、機械に合った物を作る。p181
- 自動機械は世界を壊滅させ、人間の世話係になる。p182
- 機械装置はカタツムリの殻のようにヒトの生命の一部となる。p182

第四章　制作
21　制作にとって道具的なものの果たす役割

- 制作においては、自然に暴力を加えることも正当化される。p183
- 目的は達成されたとたん手段と化し、意味がわからなくなる。p184
- 目的ではなく、永続的に存在する意味が重要である。p185
- 無意味化を阻止するために、カントは人間を最終目的とした。p187
- 自然を好き勝手に利用してよいという人間中心主義に陥る。p189

第四章　制作
22　交換市場

- 制作する人は交換市場における顕示的生産を通じて承認を獲得。p193
- 制作する人には孤立が必要であり、チームワークとは縁遠い。p194
- 顕示的生産は競合衝動に完敗し、顕示的消費に代わられる。p196
- 商品生産者も労働者も疎外され、人格として扱われてはいない。p196
- マルクスが使用価値にこだわったのは制作する人の思考を反映。p202

第四章　制作
23　世界の永続性と芸術作品

- 世界の本質を最も理念型的に示しているのが不死なる芸術作品。p205
- いかなる雄弁も濃縮されなければ詩として世界に定着できない。p207
- 芸術作品の卓越性を決定するのは、それが体現する形相＝理念。p213
- 世界が人間の故郷となるのは有用性を超えた耐久性を持つから。p214
- 詩や物語や歴史の世界の永続性なくしては、人類は草に等しい。p214